講演記録

韓日関係と相互認識 ―歴史と展望―

河宇鳳

はじめに

現在韓国と日本はアジア・太平洋時代の中心的国家として二一世紀に向かって新しい関係定立のための展望を得なければならない状況にある。侵略と抵抗、葛藤と対立がくりかえされた「非正常」の二〇世紀を清算し、善隣関係を回復しうるのか。まさに今は二一世紀の両国関係の枠ぐみを準備するもうひとつの転換期なのである(一)。

韓国と日本はよく「一衣帯水の関係」と表現されるように、隣国として有史以来悠久な関係を結び、互いの歴史展開に大きな影響を及ぼしあってきた。それでも両国は「近くて遠い国」と呼ばれているのである。地理的□文化的な近接性に比べ、心理的な距離は遠いという意味である。一九六五年の国交正常化以降、政府次元では善隣友好が提唱されているが、両国民の情緒は依然として非正常である。相互認識上の葛藤は隣接国家の間によく見られる現象でもあるが、韓日間においてはその程度が甚だしい。両国民間の情緒上の葛藤と心理的な距離感を解決するには相互認識に対する明確な理解が先決課題であるといえる。

認識とは感性的イメージを越え、理性的判断に基づいた複合的なものである。ある民族に対するイメージ形成に最も大きく影響するのはお互いに体験した事件についての記憶であろう。歴史的な集団体験の所産としてのイメージが累積すると、一つの定型化した観念として定着する。このような観念ないし信念体系をここでは「認識」と理解することにする。これは歴史的に長い間かかって形成されてきたもので、教育によって伝承される。将来、可変的ではあるが、なかなか変わらない。また、認識というのは自己実現性がある。

民族間の相互認識といえば、それは外交関係と交流を通じて形成されるが、同時に将来の態度や政策を決定するのに重要な要素となる。特に韓日間には、これが外交政策及び関係に実質的な影響力を持っている。こうした点から韓日両国民間の相互認識を考察することは、現在の両国関係ばかりでなく、未来への展望をも得ることができる有力な方法のうちの一つと考える。又、相互認識の改善こそ韓日関係の鍵であるといっても過言ではない。

第一章　相互認識の歴史的展開

第一節　古代

韓国は日本人にとっては最初の外国であった。それで韓半島の駕洛国を意味する「から」が外国を意味する言葉になった(二)。日本最初の正史である『日本書紀』に書いてある対外関係の記事を見てもその確認ができる。『日本書紀』に出てくる外国名の回数を調べてみると、合計一三四三回のうち、韓半島の国家(新羅□百済□高句麗□伽倻)が一二〇六回、中国大陸の国家が一三七回である。韓半島国家との交流が中国との交流より時代的に先であることは勿論、量的にも全体の九〇%を占めていることがわかる(三)。これに比べ、韓国側の歴史書である『三国史記』には日本関係の記事が六七回であり、『三国遺事』には一〇回ほど出てくるにすぎない。それもほとんど「倭寇」に関する短い記録だけである。これは文化の東流現象を証明していると言える。日本人の文化の本源への関心集中現象が反映された結果である。

この時期の韓国人の日本観には主に「倭寇」というイメージが強かったらしい。その外の分野についてはほとんど記録がない。

一方、日本人の韓国観は両面的に構成されている。一つは「先進文化国」としてのイメージで、文化の母胎に対しての憧れといえる。もう一つは自分の武力的優位を強調して、韓国を政治的に見くびるいわゆる「藩国史観」である。文化的劣等意識を武力的優位の誇示で晴らそうとする「武力への依存」は以後も絶間なく続く現象である。

第二節　中世

中世の韓国人の日本観は古代と同じく、侵略者としての「倭寇」というイメージが強く、恐怖□憎悪□蔑視の対象であった。文化交流やその他の記事はほとんどなく、日本の社会や文化など他の分野については全般的に無関心であったらしい。高麗末、使臣として日本を訪問した鄭夢周は一二首の紀行詩を残しているが、そこには日本が辺境に位置した「絶域」というイメージが表われている。進奉船貿易と八関会で日本の豪族の使臣と商人たちが行なった朝貢の礼と彼らの書契に出てくる「高麗上国観」から、高麗の朝廷では日本をみくびる傾向があった。

日本人の韓国観には基本的に日本書紀的史観が継承されていた。特に朝廷と公家の場合、海外情勢と相手国に対する独善的な理解が古代以来続いた。高麗と元の連合軍の日本侵攻以後書かれた北畠親房の『神皇正統紀』には「神国史観」が確立され、高麗に対する観念的優位性と敵愾心が目立つ。日本書紀的韓国観に「元寇」以来の敵愾心が加わったのである。しかし、一方には大蔵経を作った「仏教文化の先進国」であり、貿易上の実利が得られる交易対象国としてのイメージもあった。

第三節　朝鮮王朝時代

近世になって韓日両国は六〇〇余年ぶりに国交を正常化し、以後五〇〇余年にわたって緊密な交流を続けた。朝鮮王朝は建国以降積極的に対外交渉に臨み、日本も長い間の「鎖国」状態から抜け出て東アジアの国際舞台に登場した。両国は明を中心とする冊封体制に入り、交隣関係を結んだ。これによって使節を互いに派遣し、経済交易□文化交流等どの時代よりも活発な交流を行なった。

一六世紀末には壬辰倭乱(文禄□慶長の役)という破滅的な戦争があったが、朝鮮後期(徳川幕府時代)にも交流は続いた。五〇〇余名に達する通信使一行が一二回にわたって日本各地の民衆と交流し、

釜山の倭館には五〇〇余名の対馬島人が常住していた。こうした交流と接触によって、両国民は互いに具体的なイメージを形成するようになり、これが今日までの両国民の相互認識の基本的な枠になっている。

⑴ 韓国人の日本観

朝鮮時代の韓国人の対外認識の基本的な枠は朱子学的世界観に基づいた「華夷観」であった。それが外交政策として現われる時には「事大交隣」という形で具体化された。しかし認識という面から見れば、朝鮮は自分なりの朝鮮中心の世界観念を持っていた。日本観もこのような自己認識と世界観の枠をはずれなかった。ここで朝鮮は中国と同じ文化国(華)であるが、日本と女真族は儒教文化のないオランカイ(夷)であると認識していた。一五世紀後半、足利幕府が弱体化し、変則的な通交態度をとるや、日本夷狄観はさらに深化し、朝鮮の日本理解に伸縮性がなくなるようになった。

壬辰倭乱(文禄□慶長の役)があって以来、韓国人の日本認識は具体化すると同時に当然悪化した。七年間の戦争体験は韓国人の脳裏にいつまでも消えない日本観を刻んだ。それが今日までつながっている日本観の原形となった。戦後、一七世紀に盛んだった小中華意識によって日本夷狄観と対日敵愾心は益々固定化した。日本に対する再認識の主張は一八世紀中葉、実学者の李瀷によって出された。彼をはじめとする一部の実学者は既存の華夷観から脱皮して日本を研究し、再認識することを促した。しかし彼らは在野学者であって、政府の対日政策に直接影響を及ぼすことはできなかった。

⑵ 日本人の韓国観

室町時代の韓国観は伝統的な観念を継承する側面と新しい見方とが混在していた。時期的にも変化があり、朝廷□公家と武家幕府□西国地域の豪族と商人の間にも認識の差があった。後者の国際認識および韓国観が柔軟かつ開放的であったが、支配階層と民衆には一般化しなかったようである。

壬辰倭乱に対する評価も両面的であったが、徳川時代の韓国観も同じく両面的であった。

その一つは朝鮮に対する文化的尊崇感である。壬辰倭乱以後、朝鮮性理学□金属活字□陶磁器など朝鮮の文物が日本に伝来し、儒学者を中心とした日本の知識人の間では朝鮮文化について高い関心と同時に尊敬心を持つようになった。

もう一つの流れはいわゆる「日本型華夷意識」に基づく朝鮮蔑視観である。

一八世紀に入って朝鮮政府による書籍流出禁止措置と日本の中国との直接交流、徳川幕府のイデオロギーの中核であった朱子学の衰退、古学□陽明学□国学□蘭学の相対的発展などの変化の中で、朝鮮に対する関心と尊敬心は次第に弱まり、その代わりに『日本書紀』以来の伝統的な朝鮮藩国観が蘇った。

それは山鹿素行□熊沢蕃山□新井白石□安藤昌益のような儒学者ないし陽明学者たちの間で現れはじめ、本居宣長□平田篤胤などの国学者に至っては露骨な朝鮮蔑視観を現わした(四)。幕府末期の勝海舟□佐藤信淵□吉田松陰のような海防論者たちは蔑視観を越えて朝鮮侵略論を公然と展開した。時間的変化はあったが、文化劣等感と武力優位の自信感という分裂的な二つの流れはこの時期まで続いていた。

第四節　近代

十九世紀後半から始まる近代韓日関係史は日本の韓国に対する一方的侵略と韓国の抵抗の歴史にほかならない。日本は明治維新前後の朝鮮侵略論（「征韓論」）□開港の強要□不平等条約の締結□経済浸透□東学農民軍の鎮圧□日清戦争□日露戦争□抗日義兵の鎮圧などに続いて植民地支配で二〇世紀の前半を終えた。

⑴　韓国人の日本観

①　開化派は日本を近代化のモデルとして認識した反面、②　斥邪派は在野の儒林で、伝統的な日本夷狄観を持っていた。開港の前後には「倭洋一体」と見て日本を従来の「夷狄」から「禽獣」に見下げて評価した。③　民衆は開港後、日本の経済侵略の犠牲者となったので知識人より激烈な日本観を持っていた。東学の『龍潭遺詞』「安心歌」には壬辰倭乱時の侵略に対する敵対感が現われている。

このように近代韓国人の日本観は分裂的に現われ、時間が経過するにつれてより増幅した。斥邪派と民衆の日本に対する反感は親日性向の開化派に対する敵対感に変わり、近代化運動そのものに対する抵抗という形で現われた。

韓日併合は両国の関係上、また韓国歴史上最大の悲劇と評価されるように、両国民の相互認識も歪み、極端化に固定化していった。日本人には対朝鮮優越感と蔑視観が、韓国人には敵対感と被害意識が固まった。有史以来、文化の受恵国であり後進国だった日本に支配されるという屈辱感は一層強い敵対意識に変わった。全国民の集団的体験による傷痕はまだ残っているし、潜在意識化している。

⑵　日本人の韓国観

近代日本人の韓国認識には大きな変化が起こった。従来の武力優位で文化的劣等という複合感情を清算したのである。日本は近代西欧文明を成功裡に受容して以来、その基準から従来「中華」であった中国と「小中華」であった朝鮮を未開□野蛮であると蔑視しながら文化的優位を誇示するようになった。

近代日本の韓国観を構成している主要理論としては①「征韓論」(五)②　アジア連帯論(六)③　脱亜論(七)④　大アジア主義と大東亜共栄圏論(八)⑤　植民史学論(九)などがあり、また少数ではあるが、友好的な韓国観もあった。たとえば、一九〇一年に幸徳秋水□木下尚江□片山潜など社会主義者たちが作った社会民主党、一九〇七年東京社会主義有志会、大正時代の柳宗悦□吉野作造□石橋湛山、昭和時代の槇村浩□中野重治などがあげられる。この人たちの韓国観はそれぞれに一定の限界はあるが、本來の意味での「連帯論」であるといえる。

近代日本人の韓国観はこのように二つの流れがあった。しかし、前者(①-⑤)が多数派で主流を成したのに対して、後者の韓国観は極少数で例外的であり、異端視され実質的な影響力はほとんどなかった。明治時代以後、近代日本の思想は多様な展開を見せたが、対外的な面ではほとんど全てが韓国侵略を肯定していた。ただ、その時期と具体的方法に関する意見の差と論争があっただけである。この時期日本人の観念の底にはアジアでの指導的役割と日本の優越性□例外性という認識があった。この点においては何の差もなく、「膨脹主義」という目標も同じで、侵略と干渉はその使命と見做された。一般民衆は権力が作り出したイデオロギーを無批判に信奉した。それは一九二三年の関東大震災の時あきらかになった。

第五節　現代

第二次世界大戦が終わって韓国は解放されたが、まもなく東西冷戦の急流に巻きこまれて南北に分断され、同族間で戦争を行なった。日本とは一九五二年アメリカの勧告で国交正常化交渉が始まったが、植民地支配に関する清算問題を巡って一九六五年まで一四年間も難航した。その理由は日本側の韓国に対する植民地支配意識の残存と韓国側の反日感情であった。こうした相互不信にも拘わらず国交を再開したのは国際情勢の変化のなかでアメリカの強い勧告と両国の政治的必要性があったからである。すなわち、韓国は経済開発、日本は「アジア外交の出発」が狙いであった。過程と内容に足りない部分はあったが、韓日基本条約の締結は戦後の韓日関係史に一線を画した事件であり、その後両国関係の基本枠になっている。

戦後の韓日両国民の相互認識を概観してみると（いろいろな基準がありうるが）、①摸索期（一九四五―六五）、② 発展期（一九六五―八九）、③ 転換期（一九九〇―現在）の三期に分けて見ることができる。

戦後、韓国人の日本観の特徴は「分裂的な複合心理」であるといえる。日本のイメージは歴史的加害者であって憎悪の対象である反面、経済大国としての成長のモデルでもある。大部分の世論調査によると、日本は「厭な国」の順位でも一―二位、「見習うべき国」の順位でも一―二位を占める。この両面的葛藤意識ないし分裂的複合心理は近代以来持ち続けてきたもので、韓国人の日本認識の現住所といえる。

この時期日本人の韓国観の特徴は「優越感に基づく蔑視観」と「無関心」があげられる。蔑視観は近代以来の「後進小国観」と植民地時代の優越感が結合したもので、日本内の保守主義者であれ進歩主義者であれ、程度の差はあるが、意識の深層に共通的にある。

次は無関心の問題であるが、これは傲慢と無責任性の複合したもので、歴史的責任を回避しようとする心理の表出である。植民地時代に関する歴史教育を不徹底にした結果、戦後世代の韓国観も無知と無関心であるのが実情である。

第二章　相互認識の特徴

以上、韓日両国人の相互認識の歴史的展開について述べてみたが、共通的現象としていくつかの特性がみられる。

第一は、「ひまわり性周辺文化の葛藤様相」である。文化には中心部を指向するひまわり的属性があるが、韓国と日本の相互認識の展開過程をみると、文化の中心部にどちらが近く位置しているのかという問題で優位を争う現象が見られる。文化の中心が中国にあった前近代時期には、韓国が中国にもっと近かっただけに「小中華」として日本を文化的に辺境視□野蛮視した。辺境にあった日本は十九世紀中葉、新しい西欧文明が押し寄せてくるや周辺性から脱皮し、新しい中心へ向かった。国際秩序と文化の中心が西洋に移ったのを確認した日本は思い切ってアジアから抜け出し、新しい観点に立って朝鮮を未開□野蛮視した。文明観と相互認識に大逆転が起ったのである。

辺境文化意識のもう一つの特徴は、互いに相手の中心性を認めず亜流であると蔑視する傾向があるという点である。日本は前近代の時期、韓半島から文物を受容したが中国文化の亜流扱いをし、近代以後には韓国が日本から文化を受容しながら西欧文化の亜流扱いを

し、互いに高く評価しなかった。

第二は、相手に対する認識が優越感の中の劣等、劣等感の中の優越という分裂的様相を帯びている点である。近代以前までは韓国の文化先進・伝授意識と日本の武力優位意識の対立という様相を見た。この時期、日本は文化劣等と軍事優越という複合感情を持っていた。ところが、近代以後大勢は逆転した。この時期、韓国は日本について伝統的な文化優越感□敵対感と軍事強国□近代先進国という現実の間に自己分裂を感じた。こうした分裂的複合心理の中で、両国は互いに劣等感を相手に対して誇張した優越感と蔑視観をもって表現し、それによって感情的慰安を得ようとする傾向を見せたりした。

第三は、「近親憎悪」現象である。韓国と日本は地理的に近いだけでなく、古代以来人種と文化的要素において共通する点が多い。長い期間の歴史的経験と環境条件により異質な意識と価値観を持つようになり、接触の過程で葛藤と対立が発生した。しかし、大局的にみると「大同小異」であるといえるが、両国は「大同」よりは「小異」に執着しつづけながら相互蔑視観を持っている。両国は相手を認めたくないし、評価に辛い点も共通している。

第四は、自民族中心主義(ethnocentrism)現象である。それは自分が所属する民族(国家□人種)の文化(思考方式□規範□価値判断など)を基準として、他の民族の文化を「野蛮」「劣等なもの」と裁断することによって、彼らに対する蔑視□差別などの偏見を助長する態度や観念を意味する。西洋社会を頂点とした直線的社会進化論や、帝国主義時代のオリエンタリズム(orientalism)が西洋中心主義の産物として典型的な事例である。朝鮮後期に現われた「朝鮮中華主義」と「日本型華夷観念」の対立様相もそのいい例である。これは辺境文化意識から脱皮しようとする両国それぞれの自意識からの試みであるが、独善性と排他性を持っている点においては共通点がある。

結び

有史以来長い歴史の中で、韓日関係は時には不自然な関係にあった。現在の相互認識は数千年にわたる集団的体験の産物であり、歴史の堆積の結果である。従って簡単に変わったり、解決できる問題ではない。特に近代の「不幸な歴史」による葛藤は未だに清算できず未来への妨げになっている。

韓日両国の関係と相互認識の推移を展望して見ると、まず楽観的要素としては、① 活溌な相互交流 ② 世代の交替 ③ 知識と理解の増加 ④ 両国関係の発展と認識の変化などが挙げられる。

一方、悲観的要素としては ①「過去」に対する認識の深刻な隔差 ② 日本の保守右傾化など両国での民族主義の強化現象 ③ 経済部門での摩擦の深化などが指摘できる。

両国民の間に友好的な相互認識を回復するためには楽観的要素を増やし、悲観的要素を減らす努力を絶えず行なっていくしか特効の処方箋はなさそうである。ただ、後者のための自分なりの対策を講じてみると、

一つ、歴史共同研究による歴史認識のギャプの縮小。

二つ、善隣友好の歴史の再照明。

三つ、文化相対主義(cultural relativism)ないし 文化多元主義(cultural pluralism)(10)的認識の一般化。

四つ、国家・政府単位だけでなくより複合的な主体による複合的な主題についての交流が要請される、とりわけ市民連帯運動による

交流の拡大を具体的可能性を持つものとして実現する(二)。

二一世紀の韓日両国の望ましい関係はどんな姿であろうか。

三つの類型が考えられる。

① 対立と葛藤のイギリス－アイルランド model ② 従属的関係のアメリカ－中南米 model ③ 対等的善隣のフランス－ドイツ model がそれである。 言うまでもなくフランス－ドイツ model が理想的である。これを韓日関係と比較してみると、一九六三年国交正常化の段階でドイツの丁寧な謝罪があり、フランスもそれを快く受容した。その後の両国の交流が対等で貿易不均衡はほとんどない。ドイツの自発的で厳しい過去清算の努力の結果、フランスをはじめ周辺国家の信頼を得た。ドイツの統一の時にもフランスは反対せず協力をした。韓日両国もこのように相互依存的に共存しながらアジアでの共生秩序を作りあげる関係へと発展させなければならない(二)。こうした新しい構造作りのためには韓日両国民の新しい認識と姿勢が要求される。

まず、韓国人は和解の精神と「反求諸己」の姿勢が必要であると思う。日本人にはより能動的で主体的な「結者解之」の姿勢と普遍的認識に基づいた「真の国際化」を要求したい。日本人の「結者解之」、韓国人の「反求諸己」、そして両国民互に成熟した世界人として付き合う和而不同的共存。これが私の想像する未来(二一世紀)の韓日関係の姿である。

註

(一) 学者によっては、二〇世紀以後の両国関係を、① 植民地支配の一九一〇年体制 ② 韓日基本条約が締結された後の一九六五年体制 ③ サッカー□ワールドカップ(Worldcup)共同開催の後展開される二〇〇二年体制に区分もする。 それだけ現在の時点が両国関係上に大きい転換期であることを示めす。

(二) 崔書勉「古くて遠い反日の源流」『反日感情』1973、日新報道、73頁

(三) 井上秀雄『古代日本人の外国観』一九九一、学生社、84頁

(四) 矢沢康祐「江戸時代における日本人の朝鮮観」(『朝鮮史研究会論文集』6輯、一九六九)及び三宅英利『朝鮮観の史的展開』(一九八二;『歴史的にみた日本人の韓国観』河宇鳳訳、一九九一、韓国) 五章 参照。ほぼ同じ時期に藤原貞幹は〈衝口発〉で、日本文化の源流は朝鮮であり、天皇家の出自も韓半島であると考証学的に論証したが、本居宣長などから激烈な反撥を受け、異端視された。

(五) 狭い意味の「征韓論」とは、一八七三年明治政府のそれに限るが、一般的意味の朝鮮侵略論(広い意味の「征韓論」)は十九世紀日本の対外認識の基本枠を構成する要素である。 その後これは近代日本の対外思想の基盤となって、アジア覇権論□盟主論□アジア主義へと発展していった。

(六) 一八八一年結成された自由党を中心に提起された理論で、 東洋の気運を挽回するためには日本□中国□朝鮮の三国が連帯するべきであるという主張である。この時期に出た「興亜論」□「アジア主義」□「提携論」なども同じ類で、一種の集団安保体制構想であると見ることができる。 しかし連帯論は観念的次元に止まった。 その中には日本盟主論が潜在していて、いざという時には侵略論へと変わる素地がすでにあった。

(七) 脱亜論の主唱者である福沢諭吉は新しい文明観の観点から、朝鮮と中国をそれぞれ「貧弱で」、「老朽な」未開国であると見做した。一八八〇年代を風靡したこの脱亜入欧論は日本近代化の方向とアジア認識に大きに影響を及ぼし、後日の植民史学の「停滞性論」の観念的根拠になった。

(八) これは連帯論を継承しているようで、大アジア主義と結合した理論である。黒竜会と一進会が掲げた「韓日合邦論」はこの大東合邦論をまねたものである。 大アジア主義は昭和時代に大東亜共栄圏論に発展した。これは東アジアに対する日本の侵略を正当化するだけでなく、英□米との戦争挑発も同時に合理化する論理であった。 当時玄洋社□黒竜会のような大アジア主義者たちは全ての普遍的価値と基準を排除して世界を東洋と西洋に両分し、東洋は純粋□平和□被害者に、西洋は放縦□堕落□搾取者□侵略者に象徴化した。 従って日本は東洋を守る為の盟主としての使命を全うする為に戦争に出たと言う。(朴英宰「日本近代史の性格」『今日の日本を解剖する』1987一九八七、ハンギル社、二六頁参照)

(九) 侵略と支配を合理化する為の理論は植民史観として体系化された。植民史観の二つの柱である他律性論と停滞性論は古代以来の日本書紀的史観と近代以来の韓国観が合体して立てられた理論である。 それ以前までの不合理な韓国観を集大成して体系化したものであるといえる。 日本では皇国史観と呼ばれるこの理論は神国意識に基づく自己陶酔的歴史解

釈に過ぎないが、植民地時代に公教育を通じて体系的に注入され日本人の韓国観の根源になった。

（一〇）自民族中心主義に対する代案的論理として開発されたものが、文化の普遍と特殊、中心と周邊などの区分を否定し、各文化の独自的価値を認めようという文化相対主義である。ところが、文化相対主義は窮極的□普遍的価値基準が相対化され、無視される問題点がある。そのため、最近には普遍的価値を認める土台の上で、その構成要素としての各文化の価値と独自性を 認めようという意味で、文化多元主義論が提起されている。

（一一）これについては 河英善「脱近代の地球秩序と韓日関係の未来」と木宮正史「韓日市民社会の関係構築の為の条件」（『韓国と日本』二一九九七、ナナム出版、韓国）参照。

（一二）これについては 重村智計『韓國ほど大切な國はない』（一九九八。東洋經濟新報社）参照。

（韓国・全北大学校史学科教授）

※この講演は二〇〇七年一二月一三日、立命館大学文学部にて行われた。